hhh　：呼気音を示す。
・hhh　：吸気音を示す。
＿＿　：当該箇所の音が大きいことを示す。
′　行を下げで始まっている会話
　　：その行の発話者が，発話の順番（ターン）をとろうとしない相づちを，前の行の会話のその位置で発していることを示す。

3）Mehan, H. を初め多くの者が授業の会話分析を行い，「発問（I）」－「応答（R）」－「評価（E）」という構造で達成される授業の秩序化をみている。

4）Schegloff, E & Sacks, H.（1972）で，会話の終了部，特に電話の会話の終了部の構造について述べられている。実質的に発言権をパスしあう中で，会話者たちがもはや語り残したことがないことを確認し合う。そして最終交換へと持ち込まれ会話は終了していく，と分析されている。

5）会話の流れの中では会話の順番取りシステムが働き，それぞれに話者を交替し重複して話すことをなるべく避けながら会話が進む。その発話の順番を「ターン」と言う。〔橋内武（1999），メイナード泉子（1993），好井裕明・山田富秋・西阪仰（1999）Psathas, G.（1995）〕

6）⑦のおしゃべりは学習者が始めようとする冗談に対して，教師が短くしか反応せず，教師により「はい。」と区切りをつけられ途中で終了に持ち込まれてしまった例である。

7）隣接対とは，「問い」－「答」，「挨拶」－「挨拶」などのように「第一の発話」と「第二の発話」が隣り合って対になりそれぞれ異なった話し手により発せられるものをいう。「第一の発話」で次の発話者が選ばれるので，必然的に話者交替を要求する強い結び付きの発話対となる。〔橋内武（1999），メイナード泉子（1993），好井　明・山田富秋・西阪仰（1999）Psathas, G.（1995）〕

参考文献

上野直樹（1999）『仕事の中での学習』シリーズ人間の発達9　東京大学出版

西阪仰（1995）「サックスのアイデア⑤－成員カテゴリー－」『言語』11月号　大修館書店

――――（1997）『相互行為分析という視点』金子書房

橋内武（1999）『ディスコース』くろしお出版

メイナード泉子（1993）『会話分析』くろしお出版

山﨑けい子（2000）「日本語学習における「学習カウンセリング」の役割－談話構造の分析からの考察－」富山大学人文学部紀要　第32号

好井裕明・山田富秋・西阪仰（1999）『会話分析への招待』世界思想社

Erickson, F.（1982）"The Counselor as Gatekeeper." Academic Press, Inc.

Psathas, G.（1995）"Conversation Analysis." Sage Publications, Inc.〔北澤裕・小松栄一訳（1998）『会話分析の手法』マルジュ社〕

Sacks, H.（1972）An intial investigation of the usability of conversational data for doing sociology. In Sudnow (ed.) "Studies in Social Interaction." The Free Press.〔北澤裕・西坂仰訳（1995）『日常性の解剖学』「会話データの利用法」マルジュ社〕

Schegloff, E & Sacks, H.（1972）Opening up closings. In "Semiotica." Vol. 7〔北澤裕・西坂仰訳（1995）『日常性の解剖学』「会話はどのように終了されるのか」マルジュ社〕

Suchman, L.（1987）"Plans and Situatd Actions." CUP.〔佐伯胖監訳（1999）『プランと状況的行為』産業図書〕

契丹人の漢語－漢児言語からの視点－

中　村　雅　之

1．契丹人の「俗語」
2．通説への疑問
3．漢児言語
4．契丹文字で記された漢字音
5．まとめ

1．契丹人の「俗語」

12世紀後半に金国へ使者として赴いた南宋の洪邁は，『夷堅志』丙志十八において「契丹誦詩」と題する次のような文章を記している。

契丹小児初読書，先以俗語顛倒其文句而習之，至有一字用両三字者。頃奉使金国時，接伴副使・秘書少監王補，毎為予言以為笑。如「鳥宿池中樹，僧敲月下門」両句，其読時則曰「月明裏和尚門子打，水底裏樹上老鴉坐」。大率如此。補錦州人，亦一契丹也。

（百部叢書集成による。句読点は引用者。）

この文章は，契丹の子供が漢文を習い始める時に，洪邁から見て風変わりな「俗語」を用いて解釈を行うことを述べたものである。その例として唐の賈島の詩の一部分を挙げ，「鳥宿池中樹，僧敲月下門」を読む時には，「俗語」で「月明裏和尚門子打，水底裏樹上老鴉坐」と解釈するのだという[1)]。ここに言う「俗語」は契丹語を指すものと一般に理解されている。契丹語について言及するものはこの洪邁の文章を引くことが多く，未解読の言語である契丹語がいわゆるアルタイ諸語と共通の特徴を有する根拠としてしばしば用いられる。以下にその説の主なものを引用するが，いずれも「俗語」＝「契丹語」という観点に立っており，上の文章が契丹語について述べたものだというのは，もはや通説と称してよいほどである。

①田村（1939）

契丹語は，夷堅志にも「契丹小児，初読書，先以俗語，顛倒其文句而習之。……如烏宿池中樹，僧敲月下門，両句，其読時則，曰月明裏和尚門子打，水底裏樹上老鴉坐，大率如此」と謂ふ如く，語の構成法は所謂アルタイ語系たる蒙古語・満洲語と相似てゐることは明言し得よう。

②長田(1951)

契丹民族の言語が…(中略)…アルタイ語族に属することは，洪邁(1122-1202)の『夷堅志』丙集18巻「契丹誦詩」の項を見れば明白である。

③田村・小林(1952)

…(前略)…契丹語が組みあわされた一字，すなわち一語のうちに，名詞の核や動詞の変化を示す接尾語をふくむという事実は，これが中国語と異なる言語であることを意味している。これについて注意されるのは，古く北宋(ママ)の時代に，洪邁が『夷堅志』巻一八，丙志，契丹誦詩の項の中に収めているつぎの一句である。すなわち「契丹の小児は，はじめ漢文の書をよむのに，まず俗語でその文句を顛倒して習っている。たとえば漢文で，鳥宿池中樹，僧敲月下門という詩の句をよむには，月明のうちに和尚は門子を打ち，水の底裏(うち)の樹上に老鴉坐(とま)る，というようにである」と伝えている。これによって推せば，契丹文の構成法は，漢文とは全く異なり，アルタイ語の系統であることがわかる。

④島田(1979)

宋人洪邁は夷堅志に，「契丹の小児ははじめ漢文の書を読むのに，まず俗語でその文句を顛倒して習っている。たとえば漢文で烏宿池中樹。僧敲月下門。という詩の句を読むときに，月明裏(のうちに)和尚門子打(は・を・ち)，水底裏樹上老鴉坐(のうちの・に・る)とするのである。」と伝えているから，キタイ語の構成法がアルタイ語系のモンゴル語などと同一であろうことは，たやすく推測できよう。

⑤金(1988)

朝鮮半島の北，中国の東北地方（旧満州）からモンゴルにかけては，日本語朝鮮語と系統を同じくするアルタイ諸語（満州語，モンゴル語等）を話す民族が居住する……（中略）……そしてこれらの民族の間にもやはり訓読がおこなわれていたことが，次にあげる南宋の洪邁(1123-1201)の『夷堅志』の一節にみえる。

契丹の小児，初めて書を読むに，先ず俗語を以って其の文句を顛倒してこれを習い，一字に両三字を用いる者有るに至る。頃(さきごろ)使いを金国に奉ぜし時，接伴副使の秘書少監たる王補なるもの毎(つね)に予が為に言いて以って笑いと為す。「鳥宿池中樹　僧敲月下門」の両句の如き其の読む時には則ち曰く，「月明裏和尚門子打，水底裏樹上老鴉坐」と。大率(おおむね)此の如し。補は錦州の人，亦(ま)た一契丹なり。

洪邁は，南宋の紹興三十二年(1162)に，当時中国北半を征服支配していた女真族の金朝へ使者として赴いたが，その時，金側の接待役の王補という契丹人から，契丹の子供が初めて漢文を習う時には，まず「俗語」の語法によって原文をひっくり返して読む，その場合，漢字の一字が「俗語」では二字三字にもなるという話を聞いた。ここでいう「俗語」とは，先に引いた『三国史記』で，薛聡が「方言を以って九経を読んだ」という「方言」が朝鮮語を指した如く，中国語に対する契丹語を意味するのであって，要するに，中世ヨーロッパ人が，ラテン語に対する自国語を Vulgar tongue などとよんだのと同じ心持ちである。……（中略）……なお「月明裏」云々は当時の中国語の口語であるが，おそらく契丹語を解さない洪邁の為に，王補が契丹語を中国語の口語に訳してみせたのであろう。契丹語は蒙古語の一種で，その語序は基本的に日本語に等しく，だからこそ文句を顛倒させる必要があったのである。ここでの「俗語」がもし中国語の口語をいうのなら，顛倒の必要はないと思える。

⑥伊原・梅村(1997)

キタンのことばは，ジュシェン語もそうだが，アルタイ語系であったことが，つぎの話からよくわかる。

契丹の子どもは，はじめて漢文を読むとき，自分のことばで文を転倒させて習い，漢字一字を二，三字になおす。たとえば漢文の「鳥宿池中樹，僧敲月下門」［鳥宿る池中の樹，僧たたく月下の門］という詩句をよむとき「月明裏和尚門子打，水底裏樹上老鴉坐」（月明かりのもとにいる和尚が門をたたき，水のなかにある樹上に烏がとまる）というぐあいである。

洪邁は『夷堅志』丙志巻一八のなかで，こういってキタン人のことばを笑っている。

⑦清格爾泰等（1985）

関於契丹語的表達方式，宋代洪邁在《夷堅志》丙志巻十八中有一段記述：「契丹小児初読書，先以俗語顛倒其文句而習之，至有一字用両三字者。頃奉使金国時，接伴副使秘書少監王補毎為予言以為笑。如『鳥宿池中樹，僧敲月下門』両句，其読時則曰『月明裏和尚門子打，水底裏樹上老鴉坐』，大率如此。補，錦州人，亦一契丹也。」（拠中華書局一九八一年版，五一四頁）。這恐怕也是古籍中対於契丹語法習慣的独一無二的写実材料了。

以上のように，歴史・言語・文学の分野におけるいずれの研究者も，そして日本のみならず中国においても，『夷堅志』に言う契丹人の「俗語」を契丹語と見なしている。しかもそのほとんどが，「俗語」＝「契丹語」であることをはじめから前提としており，それに関する検討は行われていない。「俗語」が当時の漢語口語である可能性を考慮しているのは，わずかに金(1988)のみである。

2．通説への疑問

通説では『夷堅志』に言う「俗語」が契丹語を指すものと理解されているが，『夷堅志』には「俗語」が契丹語であると明言されていないばかりか，契丹語と解するとその文意が明快に通じないのである。

洪邁が「契丹誦詩」と題して記した文章の要点は，契丹の子供が漢文を習い始める際に，風変わりな「俗語」を用いて解釈を行うという点にある。その「俗語」の特徴は洪邁によれば，(1) 語順が通常の漢文と異なる，(2) 漢文の一字が二三字で表現される，というものである。

まず第一点について考えてみたい。もしも通説のごとく「俗語」が契丹語を指すと仮定した場合，漢文と契丹語の語順が異なることが洪邁にとってそれほど興味を引いたであろうか。洪邁はおそらく契丹語を理解できなかった。したがって，契丹語という彼にとって未知の言語が漢文の語法と異なっていたとしても，それを特別に笑いの対象としたとは考えられない。洪邁は実際には接待役の王補なる人物から説明を聞いているのであるから，洪邁の興味の対象はあくまでも王補の語った「月明裏和尚門子打，水底裏樹上老鴉坐」という漢語であったと考えるのが自然である。金（1988）の指摘するように，「月明裏」云々は当時の漢語口語である。もし問題になっているのが契丹語であるならば，なぜわざわざ例文（ここでは賈島の詩）を漢語の口語に訳す必要があるのか。仮に契丹語を解さない洪邁のために説明する必要があるのなら，「池中樹鳥宿，月下僧門敲」のように原文の語順を顛倒すれば事足りるはずである。

ここで考え方を改めて，契丹の子供が操る「俗語」なるものが，契丹語ではなくて漢語口語であったと仮定してみよう。そうすると「月明裏」云々はまさに契丹人自身が日常語る言葉そのものであると理解できる。つまり，洪邁が大いなる興味を覚えてこの文章を記した理由は，漢語も北方の地の契丹人にかかるとこのような言葉に変わってしまうのかという驚きであったと思われる。金（1988）では，例に挙げられた「月明裏」等々が漢語口語であることを指摘しながら，語順が顛倒していることを理由に，「俗語」は漢語口語を意味するものではないと結論づけている。しかし，我々は『孝経直解』など元代の口語文献にあっては，目的語を動詞の前に置いたり，日本語の「テニヲハ」に相当するような後置詞を用いる例が多く存在することを知っている。以下に若干の例を示す[2]。

（目的語を前置した例）

- 官人毎各自家以下的人不着落後了。「役人たちが各々自分より下の者をおろそかにしない。」（孝経直解6b）
- 些小漢児言語省的有。「些かの漢児言語を理解できる。」（老乞大1a）

（後置詞を用いた例）

- 官裏根底扶侍着。「天子にお仕えせよ。」（孝経直解4a）

- 你誰根底学文書来？「あなたは誰に文章（の読み方）を習ったのか？」（老乞大1a）
- 師傅行受了生文書，……「先生に新しい文章を習ったら，……」（老乞大1b）

後述するように，このような口語の漢語は「漢児言語」と称すべきものであって，北方中国の諸民族間における一種の共通語であった。その語法特徴は目的語の前置と後置詞の使用とを許容する点にある。『夷堅志』における「俗語」がまさに目的語の前置（「門子打：門をたたく」）と後置詞の使用（「月明裏：月明かりのもとで」「樹上：木に」）という2つの特徴を備えているのを見る時，元代と同様の漢語口語がすでに金代に存在したと考えることはそれほど無理な仮定ではなかろうと思う。洪邁はそれまでこのような種類の漢語に接したことがなかったために，王補の語った「俗語」としての漢語に興味を抱いたのであろう。

次に洪邁が指摘した「俗語」の特徴の第二点について考えてみたい。漢文の一字が「俗語」では二字ないし三字で表現されるということであるが，実は契丹文字では漢文とほとんど字数が変わらない[3]。したがって，「俗語」を契丹語と見なすことはこの点でも矛盾する。もっとも，この場合の「一字」「両三字」が文字のことではなく，音節のことだと考えることも不可能ではない。漢語では通常一文字が一語で一音節であることが多く，「字」と「語」と「音」とが概念として分化しにくい。洪邁が王補の語る音声としての言葉しか聞いていないのであるとすれば，漢語の一音節（すなわち一字）が契丹語では数音節で表現されることを「一字用両三字」と記した可能性もありうる。しかし，契丹語を初めて耳にして，その言語が洪邁自身の漢語よりも音節数が多いと認識するのは並大抵のことではあるまいし，ましてやそれをあたかも漢語の単語と契丹語の単語の対応が理解できたかのように「一字用両三字」と表現するのはかなり不自然である。また仮に漢語と契丹語の単語を比較することが可能だったとしても，契丹語の一単語あたりの音節数が漢語よりも多いことがはたして笑いを誘うような冗談の種になり得たであろうか。やはりこの場合も，「俗語」を北方漢語口語（漢児言語）と見なす方がはるかに合理的である。すなわち，例に挙げられた詩で言うならば，「月下」を「月明裏」，「僧」を「和尚」，「門」を「門子」，「池中」を「水底裏」，「鳥（烏）」を「老鴉」とするなど，いずれも「一字用両三字」の説明によく合う。

以上のように，洪邁の文章は北方中国における漢語口語（漢児言語）の特徴を伝統的な漢文と対比させて説明したものと見なすべきである。そうであってこそ，語順の違いや単語の長さの違いが驚きや笑いの対象となりうるのであり，わざわざ一節をなして説明する価値も生まれるのである。

通説のごとく「俗語」を契丹語と見なすべき根拠は洪邁の文章の中には見出せない。察するに，契丹人にとっての俗語であるからには契丹語であろうという思い込みと，提示された例文が伝統的な漢文とは著しく異なるものであるという印象とが通説をなさしめたものであろう。先入観なしに洪邁の文章を読むならば，例示された「月明裏和尚門子打，水底裏樹上老鴉坐」

という漢語こそが「俗語」そのものであると考えるのが最も穏当である。

3．漢児言語

「漢児」の語がすでに北朝の時代から北方中国の漢人ないしは漢化された北方民族を指して使われたことは，太田（1954）に詳しい論証がある。狭義の「漢児」は北方異民族支配下における漢人を指し，広義の「漢児」は漢化された北方の民族（契丹・女真など）をも含む。広義の漢児における共通語が北方漢語口語すなわち「漢児言語」である。

北宋の末，北方の地において漢語が諸民族の共通語であったことは，太田（1954）が許亢宗『奉使行程録』から「……凡聚会処，諸国人語言不通，則各為漢語以証方能弁之」の文を引いて確認したとおりである。

また，同じく『奉使行程録』には「金人毎差接伴・館伴・送伴客省使，必于女真・渤海・契丹内，人物俊偉詳緩，解漢語者為之，副使則選漢児読書者為之」（いま四庫全書本『三朝北盟会編』所引による）とあり，洪邁の文章にも見える「接伴副使」は（狭義の）漢児が当たる役職であった。つまり「接伴（＝接待役）」等の役には女真人や契丹人などで漢語（＝漢児言語）を理解する者が当り，その「副使（＝付き添い役）」には漢児で漢文の読める者が当たる。洪邁が金国に赴いた時に王補が「接伴副使」を務めているのは，王補が血統的には契丹でありながらも，文化的（＝言語的）には漢児と見なされていたことを示す。

さらにこの記述から，当時の北方中国における（広義の）漢児が使用言語によって二類に分けられていたことを知る。すなわち，契丹語や女真語を第一言語として漢児言語を第二言語とするもの，そして漢児言語を第一言語として漢文を読み書きできるものである。王補は後者に属した。これ以外の例，つまり契丹語（ないし女真語）と漢文の双方を駆使できるものがかなり特別な才能をもっていると見なされたことは，史伝にそれがわざわざ記されていることからも窺われる[4]。したがって漢文を直接に契丹語に訳す（あるいは契丹語で解釈する）という習慣が生まれる素地がそもそも希薄だったのであり，通説のように契丹の子供が日常的に漢文を契丹語で解釈したと考えることには相当の無理がある。

漢児言語は元代において最も隆盛を極め，『孝経直解』などに文章としても記されるようになる。その語法特徴は前述のごとく後置詞の頻繁な使用と目的語の前置を許容する点にある。宋から元にかけて，漢児言語が特に発達してきた背景を考慮に入れる時，洪邁が記した契丹人の「俗語」が契丹語ではなく漢児言語であることはむしろ自明のことのように思われる。いやしくも漢文を習おうとする契丹の子弟が漢児言語を話せないとは考えられないし，漢児言語を知りながら漢文を理解するのにわざわざ契丹語を用いるのは愚の骨頂であろう。

4．契丹文字で記された漢字音

金朝下の契丹人が漢児言語を話しており，『夷堅志』にその一端が示されているのは以上に述べたとおりであるが，当時の実際の発音はどのようなものだったであろうか。ここでは部分的に解読されている契丹文字を手がかりとして，結論的には遼金の漢児言語の発音（より厳密に言えば，漢児言語の発音を基礎とする漢字音）が元代のそれと大差ないものであったことを確認したい。

契丹文字には表意記号と表音記号とが混在しているが，920年に公布された契丹大字が表意記号，その数年後に公布された契丹小字が表音記号を追加したものと考えられている。この文字は遼が滅んで金の時代になってからもしばらくの間は用いられていた。固有の契丹語については未解読の部分が多いが，漢語語彙を表記した部分の表音的な契丹小字はかなりの程度解読が進んでいる。ここでは主に清格爾泰等（1985）に拠りつつ，遼代の漢字音の特徴を見ることにする。契丹小字の原字（＝個々の構成要素）の推定音も暫定的に同書による。なお，漢字音を表わす契丹小字は一個ないし数個の原字によって構成されるが，複数の原字から成る場合はハイフンをもって原字の単位を区切ることとする。（例：「k-uei」は「k」と「uei」の２個の原字から成ることを示す。ここでは技術的な理由により契丹小字の表示は割愛する。）

（１）－m韻尾と－n韻尾の区別あり

金 k-m　　cf. 馬 m-a / 密 m-i　（これらの m は全て同一字形の原字）

院 ue-n / 元 ŋ-ue-n　　cf. 内 n-uei / 寧 n-iŋ　（n は全て同一字形）

－m韻尾が全面的に－nに合流するのは明代前期のことであるから，遼代の資料において二者が区別されているのは当然と言える。ただし元代の『中原音韻』では唇音声母を有する音節においてはすでに－m＞－nの変化は完了しており（「品」「範」など），契丹文字資料での扱いが気になるところであるが，残念ながらそれに相当する部分の資料はなく確認できない。

（２）入声韻尾なし

密 m-i / 室 ʃ-i　　cf. 西 s-i / 礼 l-i / 儀 ŋ-i　（i は全て同一字形）

国 k-uei　　cf. 水 ʃ-uei / 内 n-uei / 圭 k-uei　（uei は全て同一字形）

略 l-iau-u / 洛 l-au-u　　cf. 道 ta-u / 吾 ŋ-u / 右 i-ou-u　（u は全て同一字形）

中古音的な入声韻尾「-p / -t / -k」を想起させるものは全くない。これは元代資料と同様の状況であり，中古の－k韻尾に相当する部分に－iや－uが見えている点までも一致する。入声韻尾を中古音と近世音の区分の指標とするならば，契丹文字資料は近世音的特徴を示す最も早い資料と言ってよいであろう。これに関連して興味を引くのは，西域の資料であるウイグル

文字資料（ウイグル語訳「大慈恩寺三蔵法師伝」における漢字音など）が10〜11世紀のものと目され，時代的には契丹文字資料とほとんど変わらないにもかかわらず，三種の入声韻尾を表記すること甚だ中古音的な状況を示していることである。これはウイグル文化圏における伝統的な字音の存在を示唆するものとも考えうるが[5]，一方ではまた，中古音から近世音への大きな変化には北方地域（すなわち遼金の版図）における漢児言語の広がりという背景が密接に関わっていたという仮定をも可能にする。

（3）中古濁音字の無声化（平声は有気音に，仄声は無気音に）

定母平声：同 t'-uŋ　　cf. 統 t'-uŋ
定母仄声：殿 t-en / 特 t-i　　cf. 徳 t-i / 点 t-em
群母平声：期 x-i /＊騎 k-i　　cf. 空 x-uŋ[6]
群母仄声：郡 k-iun　　cf. 軍 k-iun

「騎」という例外があり，また上に挙げなかったものの中にも明確に判断しかねる例もあるが，傾向としては中古の平声濁音字は無声有気音に，仄声濁音字は無声無気音になっていると見てよい。この状況は『中原音韻』と同様である。なお，ごく最近の研究である吉池（2000）によれば，精母・清母・従母・心母の字について初期の碑文資料では一様に「s-」で表記する例が見られるが，時代を下るにしたがって表記が精密になり，精母字に「ts-」，清母字に「ts'-」を用いる傾向が顕著になってくるという。そして従母字に関しては，後期碑文資料では平声字に「ts'-」，仄声字に「ts-」が用いられている。したがってこの例も含めて全体としては，契丹文字資料における中古濁音字の扱いは『中原音韻』と同じであると判断してよい。

契丹文字の解読作業は現在もなお進行中であり，対象としうるまとまった資料が十数点の碑文のみという現段階では，契丹文字によって遼代の漢字音を細部まで検討するのは容易でない。しかし，上に示したいくつかの特徴のみを見ても，遼代の漢字音が元代のそれと非常に近い状況にあったことは窺えるであろう。

5．まとめ

洪邁『夷堅志』の記述から金朝下の契丹人が漢児言語を話していたことが確認できるわけであるが，北方における共通語としての性格を考慮するならば，金朝下においては契丹人のみならず女真人も漢人（＝狭義の漢児）も多少のバリエーションを許容しつつ近似の漢児言語を話していたと考えてよい。そして『夷堅志』の記述に見える漢児言語の特徴（目的語の前置と後置詞の使用）は，そのまま元代の漢児言語の特徴として伝えられた。そのことは『孝経直解』などの資料に如実に表れている。

一方，契丹小字の研究の進展により，すでに遼代の漢字音が元代のそれとほぼ変わらない特徴をもっていることも確認できる。

元代の漢語については，特異な語法を有する資料（『元典章』『孝経直解』など）をモンゴル語の影響下に成立した特殊な文章語であると見なす論もあるが[7]，実はその特徴の多くは遼金代の漢語口語から受け継がれたものと考えうるのであって，これをモンゴル人支配のもとに突然変異的に現れたものと理解すべきではない。この点はすでに太田（1954）の強調するところである。もちろん個別的にはモンゴル語の影響を受けて成立した語彙や語法もあるが，大局的に見るならば，宋から元にかけての漢児言語の隆盛こそがその背景をなしているのである。

太田（1954）が「你」を例に論じたように，漢児言語は先ず語彙における特徴をもって唐代以前に生れた。次いで唐代を過渡期として，遼代以降には特有の語彙の発達のみならず音韻と語法の両面においても際立った特徴を有することとなり，ついに南方知識階級の言語と決定的な乖離を生じたものと推察される。明代以降，漢児言語はその“ブロークン”な部分を削ぎ落としつつ，全土的な共通語としての「官話」へと変容していくことになる。本稿においては，遼金代における契丹人（＝広義の漢児に属する）の漢語に焦点を当てつつ，漢児言語の発展過程の一端を垣間見たわけである。

注

1）「俗語」の「老鴉（からす）」という解釈からすれば，原文「鳥宿池中樹」の「鳥」は宋代には「烏」とも読まれていたようである。

2）テキストには『孝経直解』は太田・佐藤（1996），『老乞大』は鄭（2000）を用い，「6b」（＝第六葉ウラ）などにより葉数を示した。なお，鄭（2000）に収める元版『老乞大』には若干の欠落部分があるため，それらについては各種の改訂版テキストを参考にした。

3）西田（1982）に提示された契丹文の用例ならびに対応する漢語を見るに，1から10までの数詞，「馬」「羊」などの動物，さらに「冬」「年」「月」などの語はいずれも漢語と同じく一文字（＝ひとかたまり）の契丹文字で記されている。さらに道宗哀冊文において「仁聖大孝文皇帝哀冊文」に相当する契丹文は漢文と同じく10文字から成り，「寿昌七年歳次辛巳正月壬戌朔十三甲戌」に相当する契丹文も漢文と同じ字数で記されている。他の例を見ても，おおむね契丹文と漢文の字数は大きくは違わないようである。

4）白鳥(1989)では『遼史』から次のような例を拾っている。
「敏給好学，通契丹漢字，能詩。」（遼史巻64皇子表長没）
「幼好学書，過目不忘，善遼漢文字，於詩尤工。」（遼史巻89耶律庶成伝）
「幼聡悟好学，甫七歳能誦契丹大字，習漢文，未十年博通経籍。」（遼史巻89蒲魯伝）
「端毅簡厳，識遼漢字，通天文相法。」（遼史巻82蕭陽阿伝）
「貌偉言弁，通遼漢文字。」（遼史巻96蕭楽音奴伝）
このほか，『金史』には次のような例が見える。
「胡十門善漢語，通契丹大小字」（金史巻66胡十門伝）
「宗秀……渉猟経史，通契丹大小字」（金史巻66宗秀伝）

「布輝譏女直・契丹・漢字」(金史巻66布輝伝)

5) ウイグル字音に関する議論は，高田 (1985, 1990)，吉田 (1994) を参照。

6) 渓・暁・匣母は契丹小字では同一字形で記され，清格爾泰等 (1985) は「k'/x」としている。

7) 古くは田中 (1962) が『元典章』の特異な文体を「蒙文直訳体」として白話聖旨碑などの文章と比較し，最近では宮 (1998) が「『孝経直解』が『孝経』のモンゴル語訳から再び漢語に訳しなおされた可能性すらある」とする見解を示している。「蒙文直訳体」と「漢児言語」を概念として区別すべきことについては，竹越 (1994, 1996a, 1996b) を参照。

参考文献

伊原弘・梅村坦 (1997)『世界の歴史7　宋と中央ユーラシア』(中央公論社)

太田辰夫 (1954)「漢児言語について」『神戸外大論叢』第5巻第3号 (太田1988所収)

太田辰夫 (1988)『中国語史通考』(白帝社)

太田辰夫・佐藤晴彦 (1996)『元版孝経直解』(汲古書院)

長田夏樹 (1951)「契丹文字解読の可能性」『神戸外大論叢』第2巻第4号

長田夏樹 (1984)「契丹語解読方法論序説」『内陸アジア言語の研究』1

金文京 (1988)「漢字文化圏の訓読現象」『和漢比較文学研究の諸問題』(汲古書院)

島田正郎 (1979)『遼朝史の研究』(創文社)

島田正郎 (1993)『契丹国』(東方書店)

白鳥庫吉 (1989)「契丹女真西夏文字考」『史学雑誌』第九編第11・12号

高田時雄 (1985)「ウイグル字音考」『東方学』70輯

高田時雄 (1990)「ウイグル字音史大概」『東方学報京都』62冊

竹越孝 (1994)「蒙文直訳体と漢児言語」『語学漫歩』(東京都立大学中国文学研究室) 19号

竹越孝 (1996a)「呉澄『経筵講義』考」『人文学報』(東京都立大学) 273

竹越孝 (1996b)「許衡の経書口語解資料について」『東洋学報』78巻3号

田中謙二 (1962)「元典章における蒙文直訳体の文章」『東方学報京都』32冊

田村実造 (1939)「遼［言語・文字］」『東洋歴史大辞典』(平凡社。いま臨川書店の縮刷復刻版1986による)

田村実造 (1976)「契丹・女真文字考」『東洋史研究』第35巻第3号

田村実造・小林行雄 (1952)『慶陵』1 (京都大学文学部)

鄭光 (2000)『元代漢語本老乞大』(慶北大学校)

西田龍雄 (1982)「契丹文字解読の新展開」『アジアの未解読文字』(大修館書店)

宮紀子 (1998)「『孝経直解』の出版とその時代」『中国文学報』(京都大学) 第56冊

吉池孝一(2000)「契丹小字正書法の変遷」第16回対音対訳資料研究会レジュメ(於富山大学，9月16日)

吉田豊 (1994)「ソグド文字で表記された漢字音」『東方学報京都』66冊

清格爾泰等 (1985)『契丹小字研究』(中国社会科学出版社)

How did Newton appreciate Shakespeare? NO.2

Taro KUSANAGI

Note: Under this title, I will write an essay composed of 10 chapters in English. This paper contains 3 chapters, from (4) to (6), of them. I will attach synopsis in Japanese to the beginning of my paper. The synopsis covers 3 chapters, only what is in this paper, not the whole 10 chapters.

Synopsis in Japanese (10章のうち，本稿に収録した3章の要約)

ロックとニュートンは聖書を話題にし，信者の妻と結婚すれば信者でない夫が信者になるかといったことを手紙でやりとりしている。ニュートンは結婚で急に信仰が変化することは考えず，教育の効果とか，現代的民主的な取り扱いをして，今日の外国人同士の結婚を考えるときのような態度だ。それは，ほとんど政治的といってよく，当時，政治と宗教は深く結びついていた。ホイッグのリーダーであるシャフツベリー伯爵に捧げられたカトリックを馬鹿にする劇作品『教皇ジョアン』に『国家的詩人の形成』の中で言及し，その脚注でドブソンはいう。この劇の効果を最小限にくい止めるため，劇を上演した王様一座の競争相手の公爵一座を借り切って，政治的に穏健かつ正統的なダヴナント改作の『マクベス』を、チャールズ二世のカトリックの情婦ポーツマス公爵夫人は宮廷人に見せた。その頃ニュートンはロバート・フックと手紙で力学論争をしていた。ニュートンがカトリックの陰謀の風評を信じたかどうかは定かでない。ホイッグとプロテスタント支持だったことは明らかで，1685年，あるカトリック教徒に学位を与えさせようとカトリックのジェームズ二世が圧力をかけたのに抗議するケンブリッジ大学全権委員の一人になっている。

ポーツマス公爵夫人のエピソードからシェイクスピア劇をカトリック貴族の側とするのは早計で、『 教皇ジョアン』は、ホイッグのリーダー、シャフツベリー伯爵にささげられたものである。第四代シャフツベリー伯爵の最初の夫人スザンナ・アシュリー・クーパーはシェイクスピア婦人クラブのメンバーとしてシェイクスピアを支持した。また大ざっぱには右翼と分類できる反ウォルポールの政治的立場からの文化的基準づくり（ドブソン）とされるコブハム子爵に

富山大学人文学部紀要

第 34 号

富山大学人文学部

２００１